

新婦人で夢とロマンをむかえて

広島 久保美津子さん

2015年被爆70年、NPT再検討会議へ、被爆者の証言の連載が4月からスタートします（月1回）。連載を前に、広島の久保美津子さんにお話をうかがいました。

新婦人創立のとき、
「みんなの力を一つにし
ましよう」というよびか
けがありましたね。その
時「あー、日本中の女性
たちといっしょに核兵器
廃絶の運動ができるん
だ」と思うと、私はうれ
しくてうれしくて…。広
島の新婦人結成の集まり
は壮観でしたね。私にと
って、新婦人で活
動するのはすばら
しい夢であり、ロ
マンだった。だか
ら現実はいしんどい
けど、がんばってこれた
と思うんです。

◇
1945年8月6日8
時15分、当時16歳だった
私は、通学途中、広島駅の
近くの場町で電車を待
っている時に被爆しまし
た。その時、何が起こっ
たかはわかりません。西
の方から強い光がきて、
アツと思ったときは、爆
風で飛ばされて地面にた
たきつけられていまし
た。だいぶたって気がつ
くと、髪は焼けてちりち

新企画

いま伝えたい ——被爆者から

（4月より月1回掲載）

2015年・被爆70年
NPT再検討会議へ



『木の葉のように焼かれて』の第1集を手に（2013年・夏）

りに逆立ち、左のほほから首にかけて、腕とひざ下にやけどを負っていました。爆心地から4^{キロ}四方は焦土となったなかで、1・9^日地点で被爆した割には奇跡的にやけども少なかったんです。教科書を抱いていたのも幸いしたのでしょうか。材木やらいろんなものが積み重なっているなかをはだしで帰りました。

段原の自宅は、比治山の影になっていたので、焼けずに残っていました。爆風で倒されていましたが、別の場所で被爆した弟も戻ってきました。が、全身やけどを負い、皮膚がみんなぶらさがっていた状態で、それは無残なものでした。看護婦だった母は、手早くシーツを包帯のように破り、亜鉛化軟膏を塗って処置してくれました。その日は10^{キロ}くらい離れた収容所に避難しましたが、ウンウンうなっている人たちがみんなムシロの上に寝かされているんですよ。私の隣でおむすびをパクパク食べていた女子

学生も、翌朝はもう亡くなっていました。本当に戦争はひどいものです。

その後、母と弟と3人で40^{キロ}離れた西条の親戚で1カ月くらい養ってもらい、私はほとんど治ったんです。足は長いことかかりましたけど、あとは平気でした。弟も何度か死にかけましたが助かりました。

広島市内に帰って、小学校の時の先生の紹介で仕事を始めました。雑用でしたけれどもね。そこに、のちに原爆詩人として有名になった峠三吉がいたんですよ。

峠さんらが文化連盟をつくるっていう、一番若い私を誘ってくれました。「われらの詩(うた)」

というサークル誌をいっしょに出したりしたんです。峠さんたちの文化活動が下地にあって、平和の問題も勉強をして、みんなだんだん目覚めていった。当時、占領下の広島で、原爆反対の集会や署名など平和運動がくり広げられていました。

その後、銀行の従業員

組合の書記として活動していたころだったでしょうか、新婦人の広島支部をつくらうと、30人くらいが集まりました。私は文化部を担当し、みんなの声を残していこうと「木の葉のように焼かれて」という手記集をだすことに。当時、まだ原爆のことを表だってみんなに話すことはできず、初めの10年くらいはすごく難しかったです。私も第1集に載せたときはペンネームでしたから。

私はアメリカ軍やABC(原爆障害調査委員会)が憎かった。しかし新婦人で手記集をつくっていく中で少しずつ変わってきました。憎しみは連鎖され、ずっと続いていきます。被爆者の思いに本当にこたえるのは、戦争はぜったいにだめ、核兵器をなくそうと運動することだと思えるようになったんです。新婦人だったからこそ、この手記集は今日までずっと続いてきたと思いますよ。新婦人は誇りです。こうして若い人につないでるんだからね。

元新婦人広島県本部会長を務めた久保美津子さん。このインタビューは2013年8月6日広島でのものです。久保さんはがんのため、13年12月9日85歳で亡くなられました。心より哀悼の意を表します。